

報道各位

2026年1月27日

公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

瀧口修造 書くことと描くこと

2026年6月23日 [火] -10月4日 [日]



1. 安齊重男《瀧口修造、自由が丘画廊、東京、1978年1月》1978年/1980年代前半、石橋財団アーティゾン美術館 © Estate of Shigeo Anzai

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館（東京都中央区、館長 石橋 寛）は、5・4階展示室にて、「石橋財団コレクション選」として、近代を中心にコレクションを代表する作品を展示するとともに、「瀧口修造 書くことと描くこと」展を開催します。

石橋財団は、昭和期を代表する詩人にして美術批評家、瀧口修造（1903-1979）による作品163点（他の作家との共作含む）を所蔵しています。本展は、収蔵後にこれらの作品のおよそ半数を一挙に公開する初の機会となります。

1920年代にシュルレアリスムの影響下に自ら詩作を始め、1930年代から戦後にかけて、ポール・セザンヌから同時代に至る美術についての思索と著述を重ねていく瀧口の歩みは、「書く」営みに貫かれたものです。その瀧口が1960年に本格的に試みるようになるのが、自身で「デッサン」と称する造形作品の制作です。「書く」ことを通じて世界と対峙してきた瀧口において、「描く」こととはいかなる行為であったのか。本展は、詩作から美術批評、展覧会の企画や他の作家との交流など、瀧口の活動全体を視野に収めながら、多様な実験的技法による瀧口作品と、パウル・クレーやマルセル・デュシャン、ジョアン・ミロをはじめとする関連作家の作品、あわせて約120点の展観を通して、この問いを再考するものです。

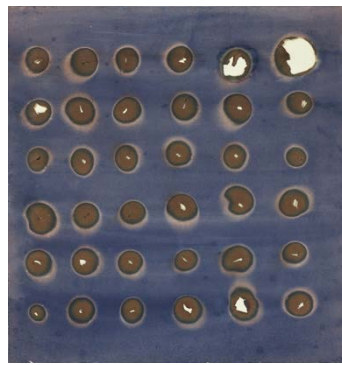
【見どころ】

1) 石橋財団が近年収蔵した瀧口修造の造形作品を初めて大規模に公開。

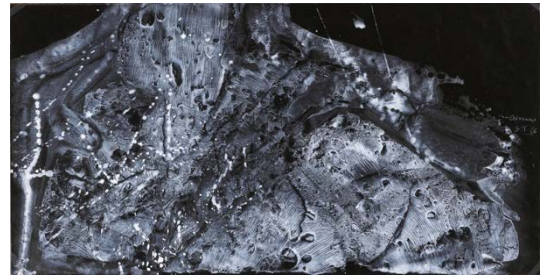
石橋財団は近年、瀧口修造の作品を相次いで収蔵し、その総点数は現在、他の作家との共同制作作品を含めると、計163点にのぼります。それらには、生前の主要な展覧会に出品されたものや、交流のあった作家に贈られたものなど、瀧口の創作をうかがう上で重要な作品が含まれています。この瀧口コレクションの一部は、2021年の「STEPS AHEAD 新収蔵作品特別展示」以降、複数回にわたり、アーティゾン美術館で公開されてきましたが、本企画は、瀧口を企画の中心に据え、これらの作品のおよそ半数を一挙に公開する初の機会となります。



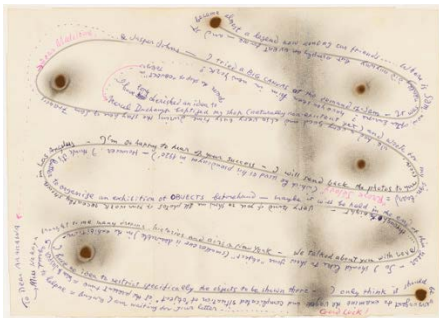
2



3



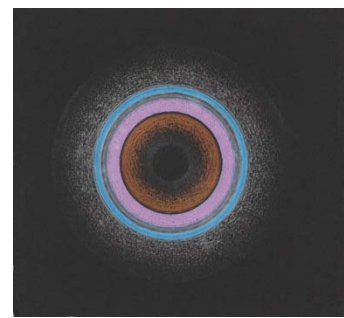
4



5



6



7

2. 瀧口修造《無題》1960年
3. 瀧口修造《無題》1962年
4. 瀧口修造《作品》1966年
5. 瀧口修造《無題》1968年
6. 瀧口修造《私の心臓は時を刻む》1971年
7. 瀧口修造《無題》1971年

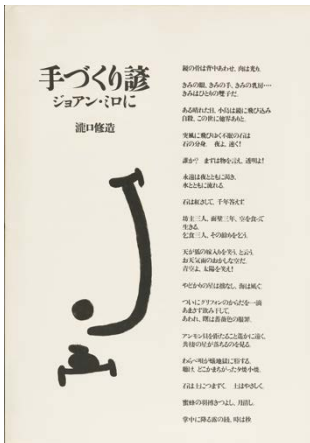
全て石橋財団アーティゾン美術館蔵

2) 初期に始まる詩作や評論などの「書く」行ないと、後年に本格化する「描く」行ないの関わりを探る。

瀧口がそれまで取り組んでいた評論活動を控え、造形活動に多くの時間を費やすようになるのが、1960年頃のことです。この一見、唐突に映る、「書く」ことから「描く」ことへの移行について、瀧口の中でこれらふたつの行ないが相異なるのではなく、自然と脈絡を通じるものであったことは、当時の自らのテキストで語っています。本企画はこの点に着目し、1920年代の詩作から、続く時期に始まる美術評論など、瀧口の「書く」行ないを踏まえ、そこからいかにして「描く」行ないへと至ったか、その通路を探ります。

3) セザンヌから草間彌生まで、関連作家の作品を石橋財団コレクションより出品。近代以降の美術に対して瀧口が向けた視線をうかがう。

シュルレアリスムへの関心から1930年代に美術に接近した瀧口は、1938年に自身の近代芸術観を示す『近代芸術』（三笠書房）を刊行。1940年に刊行した『ミロ』（アトリエ社）は、ジョアン・ミロに関する世界で最初のモノグラフとして知られます。戦後は、読売アンデパンダン展や神田駿河台下のタケミヤ画廊の展覧会活動を通じて、同時代の作家たちの紹介に努めたのをはじめ、1958年には初めて渡欧し、アンドレ・ブルトンやアンリ・ミショー、マルセル・デュシャンらと交流。特にミロやデュシャンら一部の作家とは、尽きせぬ着想源や共同制作のパートナーとして、後年の制作活動においても関わりを結んでいます。20世紀中盤という転換期を生き延びた存在として、瀧口はいかなる美術観を形成し、自らによる実践のほかに、どのような作家の創作に目を向けていたのか。関連する作家の作品を石橋財団コレクションより出品します。



8



9



10



11



12



13



14

- 8. 瀧口修造、ジョアン・ミロ《手づくり諺 -ジョアン・ミロに》1970年 © Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5301 ★
- 9. 瀧口修造、岡崎和郎《検眼図》1977年 © Kazuo Okazaki
- 10. 瀧口修造《マルセル・デュシャン語録》1968年
- 11. パウル・クレー《小さな港》1937年
- 12. 岡鹿之助《雪の発電所》1956年
- 13. 福島秀子《銀の絵》1959年
- 14. 荒川修作《クールベのキャンバス No.2》1972年 © 2016 Reversible Destiny Foundation. Reproduced with permission of the Reversible Destiny Foundation

全て石橋財団アーティゾン美術館蔵

瀧口修造 (1903–1979)



15. 安齊重男《瀧口修造、自由が丘画廊、東京、1978年1月》
1978年/1980年代前半
石橋財団アーティゾン美術館
© Estate of Shigeo Anzai

富山県に生まれる。1921年に上京。1926年から慶應義塾大学文学部英文科で西脇順三郎に学び、当時最新の芸術動向であったシュルレアリスムに関心を寄せるとともに、自ら詩作を始める。1930年にアンドレ・ブルトン『超現実主義と絵画』を翻訳、刊行。この時期より美術に関心を寄せ、シュルレアリスムの造形活動を中心に論じるようになる。1950年代に入ると、美術時評の執筆に盛んに取り組むようになるほか、読売アンデパンダン展の批評やタケミヤ画廊の展覧会活動の作家選定などを手がけ、日本の同時代美術への関与を深めていく。1958年の第29回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展では、日本館展示のコミッショナーと審査員を務めた。1960年頃から評論の執筆を控えるとともに、ドローイングや水彩などの制作に取り組み始め、同年10月に初個展「私の画帖から」(南天子画廊)を開催。1970年代にかけ、多様な技法や作品の様態を実験的に試みながら、自作の発表を重ねた。1979年に病没。

【他の出品作家】 *生年順

ポール・セザンヌ、オディロン・ルドン、コンスタンティン・ブランクーシ、パウル・クレー、パブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック、ジャン・アルプ、マルセル・デュシャン、マン・レイ、マーク・トビー、ジョアン・ミロ、ジャン・フォートリエ、岡鹿之助、ルーチョ・フォンタナ、アンリ・ミショー、ジャン・デュビュッフェ、クリスチャン・ベラルール、ジョゼフ・コーネル、斎藤義重、村井正誠、脇田和、浜口陽三、オノサト・トシノブ、ヴォルス、駒井哲郎、野見山暁治、元永定正、アントニ・タピエス、福島秀子、山口勝弘、草間彌生、ジャスパー・ジョーンズ、岡崎和郎、饅頭、荒川修作

【関連プログラム】

土曜講座

2026年7月25日 [土]

第1回「瀧口修造と書／描く／こと」

講師：朝吹亮二（詩人、慶應義塾大学名誉教授）

申込受付開始：6月23日 [土] 11:00 予定

2026年8月29日 [土]

第2回「レクチャー・パフォーマンス 書くことと描くことの間を発掘する」

講師：鈴木ヒラク（アーティスト）

申込受付開始：7月21日 [土] 11:00 予定

時間：14:00–15:30 (13:30 開場)

会場：アーティゾン美術館 3階 レクチャールーム

定員：80人

ARC レクチャー

2026年7月4日 [土]

「瀧口修造と石橋財団コレクション」

講師：島本英明（石橋財団アーティゾン美術館学芸員）

申込受付開始：5月中旬以降予定

時間：14:00–15:30（13:30開場）

会場：石橋財団アトリサーチセンター（東京都町田市）

定員：40人

*いずれも事前申込制・先着順

*詳細は当館ウェブサイトにてお知らせします。www.artizon.museum/program/

【開催概要】

展覧会名： 瀧口修造 書くことと描くこと

会 期： 2026年6月23日 [火] –10月4日 [日]

開館時間： 10:00–18:00（毎週金曜日は20:00まで）*入館は閉館の30分前まで

休 館 日： 月曜日（7月20日、9月21日は開館）、7月21日、9月24日

会 場： アーティゾン美術館5・4階展示室

主 催： 公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館

入館料（税込）：日時指定予約制（2026年5月26日 [火] よりウェブ予約開始）

当館ウェブサイトよりご来館前にウェブ予約チケットのご購入をおすすめいたします。
空きがあれば当日でもご購入いただけます。

ウェブ予約チケット1,200円、窓口販売チケット1,500円、学生無料（要ウェブ予約）

*中学生以下の方はウェブ予約不要です。

*この料金で同時開催の「エツレ・ソットサス」展をご覧ください。

担当学芸員：島本英明、内海潤也

アーティゾン美術館 〒104-0031 東京都中央区京橋1-7-2

Tel: 国内 050-5541-8600 海外 047-316-2772（ハローダイヤル）www.artizon.museum

アクセス：JR東京駅（八重洲中央口）、東京メトロ銀座線・京橋駅（6番、7番出口）、東京メトロ・銀座線/東西線/都営浅草線・日本橋駅（B1出口）から徒歩5分

同時開催

エットレ・ソットサス —魔法がはじまるとき、デザインは生まれる



エットレ・ソットサス(1917-2007)は、20世紀イタリアデザインにおいて世界的に知られる巨匠です。1950年代からオリベッティ社やポルトロノーヴァ社のデザイナーとして数々の名作を生みだし、1981年には国際的なデザイナー集団「メンフィス」を結成して、しばしばポストモダンと評される革新的なデザインで一世を風靡しました。近年、石橋財団では新たにデザイン分野の作品収集にも注力し、ソットサスの初期から晩年におよぶ100点を超えるコレクションを形成しました。本展はこれらの作品を一挙に公開する日本初のソットサスの大回顧展であり、また当館初のデザイン展です。

エットレ・ソットサス《カールトン》
1981年(デザイン) / 1981年(製作:メンフィス・ミラノ)、
石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

会場：アーティゾン美術館 6階展示室
主催：公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館
後援：在日イタリア大使館

【広報用図版】

1点のみ掲載の場合は1ページに掲載の図版いずれかをお使いください。
掲載時には必ずクレジットをご記載ください。また、文字載せやトリミングはご遠慮ください。

■図版は、下記サイトからダウンロードしていただけます。

<https://www.artpr.jp/artizon/takiguchi2026>



■★のついた作品は著作権保護期間中です。ご利用については下記にご相談ください。

14. 荒川修作《クールベのキャンバス No.2》を印刷物にてご利用の場合、
完成後、見本誌3冊の送付をお願いいたします。

本プレスリリースについてのお問合せ先
アーティゾン美術館 広報課 松浦・小川・宮武
*一般の方のお問合せ先は050-5541-8600 (ハローダイヤル) です。
E-mail: publicity@artizon.jp
TEL: 03-6263-0132 (広報課直通・誌面への掲載はご遠慮ください。)
〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2